

第3種郵便物認可

山陽新聞

STORY 岡山の五輪史

第5部 幻の代表 ③

ボイコットへ

失意からの「リベンジ」

激痛をこらえながら胸まで担いだバーベルを差し上げることはできなかった。逆転を懸けたジャークの最終試技は失敗に終わったが、重量挙げフェザー級の平井一正は両手の皮がめくれ、アクシデントを乗り越え、初回の五輪で堂々の3位に食い込んだ。

26歳で挑んだ1976年モントリオール五輪。この競技で銅メダル2個にとどまった日本に一つをもたらす、隆盛に陰りが見え始めていたお家芸の威信を保った。

岡山県和気町出身のリフターは中学校で野球に熱中し、強豪の関西高に進むが、1車を争うレベルにはなく退部した。3年生になり、校長に勧められるまま軽い気持ちで始めたのが重量挙げだった。最初で最後の県高の校総体、続く中国大会で立て続けに優勝。ただ、インターハイ出場には持ち記録が足りなかった。

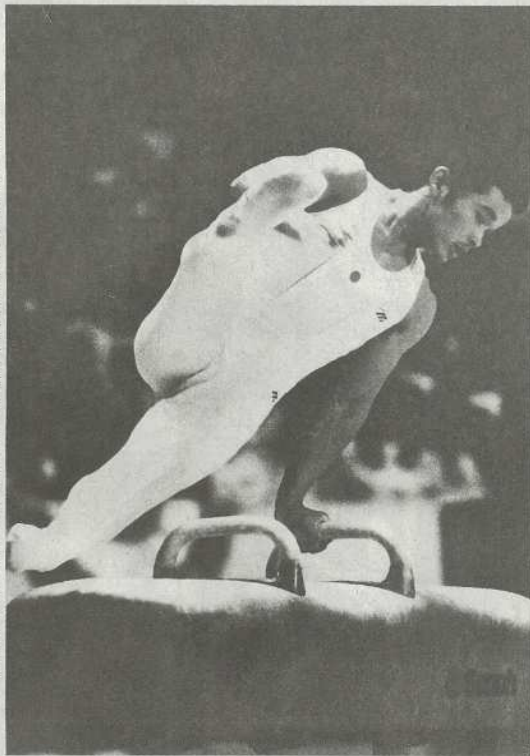
4年後はもっと上を狙える。こう手応えがあった平井はモントリオール後、全そをさげ競技に打ち込んだ。80年モスクワ五輪の前年に行われた最終選考会は金メダルを射撃に捉える好記録で快勝。2度目の大舞台を控え、調整は万全だった。

同様に、体操男子で順調な仕上がりを見せていたのが梶谷信之(現岡山大名菅教授)だ。社会人の強豪・紀陽銀行に所属し、当時25歳。選手としての絶頂期を迎えており「メダルを取る自信も、自らへの期待もあった」。モスクワ行きの切符を勝ち取り、胸を高鳴らせていた。

一方の平井も「強豪国のソ連(現ロシア)で世界一になることに意味があった。ショックで1カ月ほど練習場にも行けなくなった」。残酷な現実打ちめされ、この年限りで第一線を退いた。

燃え尽き症候群のような状態に陥った梶谷は一時、引退も頭をよぎったという。何より一肉体的にも技の精度も、少しずつ下降線をたどるのを自覚しながらの4年間はしんどかった。それでも無念を晴らしたい一心で踏ん張り、出場を果たした84年ロサンゼルス五輪で、後にも先にもあの時だけという体験をする。

「今もモスクワのことは胸のつかえとして残っている。やっぱり金を取るまではやめられないよね」。2024年パリ五輪に向けた強化指定を受けた教え子と、二人三脚で夢を追う。(松原悠)



ロサンゼルス五輪で演技する梶谷信之。ボイコットに泣いたモスクワ大会のショックを乗り越え、執念で二つのメダルをつかんだ。1984年



モントリオール五輪の重量挙げフェザー級で3位入り、表彰式で笑顔を見せる平井一正(右)。頂点を狙った4年後のモスクワ大会はボイコットにより出場がかなわず、失意のうちに第一線を退いた。1976年

メモ 岡山県ゆかりのアスリートは6人がモスクワ五輪の「幻の代表」に名を連ねた。体操男子の梶谷信之は赴任した岡山大や国体岡山県代表などの指導に当たり、今も県協会の役員を務めている。レスリングの清水一夫は引退後、母校の岡山日大高(現倉敷高)で選手を育てた。陸上男子400m障害の長尾隆史は岡山県教委や文部科学省で長く強化に携わり、現在は県スポーツ協会での任に就いている。重量挙げの平井一正、陸上女子やり投げの松井江美(美作高出)、競泳男子バタフライの香山進介(岡山・岡輝中出)はいずれも県外の高校などで指導者の道に進んだ。